



陸奥に咲ける百合花

佐藤海澄

「如日月光明能除諸幽明」

現代教育者の甚浮薄に流れ行く今日、一婦人の身を以つて雄々しく職に殉じたる小野訓導について書きたいと思ふ。

大正十一年七月七日こそ實に怨の多き此の悲劇を生んだ日である、此の日宮城縣宮尋常高等小學校尋常四年生受持訓導小野さつき女史に引きつれられたる六拾四名は、小學校より約七八町距でたる白石川河畔中原にこそ野外寫生に出かけた、其日や天氣清朗川を後に前を見ると濃緑の林梢はなれて山あり更に遠く距つて、はるかに連峯が聳て居るので遠中近の描寫六法を授けるつもりであつた、思ひ／＼に筆を運して居た生徒は當日の熱にたえかねて先生水を浴びさせて下さいとせがむので、始めは今は學科の時間であるからと説き聞かせて、熱心に寫生を續けてゐた。

何しろ水泳など一番すきな年頃の四年生であるから、女史の見守の目を盗み早や二三人の兒は水煙を立てつゝ嬉々として水泳をやつて居る中に、何うしたはずみか三人の生徒は深き所にをちいり助けを乞ふ聲女史の耳目を驚かした。

突然起つた悲しき救命の聲、始めて成澤志村大場の三生徒が水に溺れんとして居るのを見たので、ちつとの

隙もなかつた女史は、袴たびをつけたまゝ飛び込んで、志村大場の二名を救ひ三人目の成澤を救はんずるせつな、早や成澤の姿は水に没して了たので更に、水に濡れて活動の自由をしばる袴を除くすきもなく、成澤を尋ね居りしが苦しきの餘りに縫つく成澤のために、全く身體の自由を失ひ遂に力も盡きはて、成澤と、もに、水底深く沈みはて、終つたのであつた。

之を目撃して居りたる兒童は、施す術も知らず只聲を揚げ泣くばかりであつたが、此の慘劇を見て先生が死んだ……、と狂氣の如く部落を駆けまわる三四名は、學校に駆け込んで「先生と成澤さんと川に沈んだから早く来て下さい」と息きれ々に報らせた。

此れを聞いた訓導達及び村の人達は、宙を飛んで白石河原に先生及び生徒を引上げ色々蘇生に手をつくしたが、二人の魂魄は天に歸したか遂に蘇生するに至らなかつた、二人の父母及び村人は二人の屍體を取りまきながら悲嘆の涙にくるゝばかりであつた。

一時四十分！それは小野女史が職に殉じた時刻である、水にぬれたる小野訓導の特計の針は實に一時四十分を指して停つてゐた。

刈田嶽の夕雲につゝまれて暗く、遠く近くの麥やきの煙も訓導の魂を弔かと思れいごごかなしき間に、女史及び兒童の屍は學校へと運れた。

悲しき一夜明けて、九日午前三時教育者の龜鑑さつき女史の遺骸は茶毘一片の煙と化し終つた。

叫鳴小野訓導の魂は永久に生きなんか。

